

何歳で堅信を授けたらよいか 洗礼・堅信・聖体の秘跡授与の順序に関する諸見解¹

ゾーイ・ライアン「ナショナル・カトリック・リポーター」紙(2011年5月13日号掲載)

小学校2年生のカトリック信者の生活は大変

あなたは、ゆるしの秘跡の準備をし、熱心に初聖体の準備もしています。そんなあなたが、もしも堅信の秘跡の準備もするとなったらどうしますか？

今年の春、英国リバプール大司教区は、来年から堅信を8歳で授けるようにすると発表しました。1990年代中ごろ、米国のいくつかのローマカトリックの教区でも、小学校2年生か3年生の時に、初聖体の直前に堅信を授けるという同様の動きがありました。米国のほとんどの教区では、中学生か高等生に堅信を授けてはいるのですが。

7歳では幼すぎるでしょうか？あるいは16歳では遅すぎるでしょうか？堅信を受ける準備ができる世界共通の年齢というようなものはあるのでしょうか？

2年生か3年生の時に初聖体と一緒に堅信を授けている諸教区では、堅信を今までよりも早く授けるようになったのは「本来の順序」に戻したからだと言います。つまりキリスト教初期においては、入信の秘跡の順番は、洗礼、堅信、それから初聖体でした。東方典礼と東方正教会において、赤ちゃんは洗礼と堅信と初聖体のすべてを同時に受けています。西方教会では4世紀に、この実践をやめてしまったのです。

2007年のファルゴ教区の調査によると、フェニックス教区、タイラー教区(テキサス)、ゲイロード教区(ミシガン)、マーケット教区(ミシガン)、ファルゴ教区(ノースダコタ)、スポーカン教区(ワシントン)、ポートランド教区(メイン)、グレート・フォールズビルディングス教区(モンタナ)、グリーンズバーグ教区(ペンシルヴァニア)、サギノー教区(ミシガン)の米国10教区が、洗礼、堅信、聖体を「本来の順序」で授けています。

「堅信はいつでも一つの問題を提起している」と Joseph Martos は言います。彼は、ベラルミーノ大学(ケンタッキー州ルイビル)で秘跡史を教え、「聖なるものへの扉 カトリック教会における秘跡の歴史入門」、「秘跡 分野を超えて相互に影響しあう学問」などの著者でもあります。

Martos によれば、子どもたちは初聖体を受け、青年期初期に堅信を受け、そして教会に行かなくなります。「私たちはこの儀式を行っています。...しかしその儀式がその人の人生における本当の転換期にはなっていないのです。これは神学上の問題ではありません。問題は、儀式の性質と目的、とりわけ通過儀礼²と加入儀式をどのように扱わねばならないかということにあるのです。堅信を受けた時に、カトリ

¹ 訳者注：この副題は、訳者が加筆したものである。この記事の背景には、教皇ベネディクト16世が使徒的勅告『愛の秘跡』で全世界の司教協議会に、「17 キリスト教入信の過程はつねに聖体の秘跡を受けることを目指すものでなければなりません。...洗礼と堅信を受けることは、聖体に向けて秩序づけられたものであることを決して忘れてはなりません」、「18 どのようにすれば、信者が入信の過程全体の目的として、聖体の秘跡を中心に置くことができるかを考える必要があります」と呼びかけたことがあると判断したからである。

² 訳者注：「通過儀礼」rites of passage は、ヴァン・ジュネップが紹介した社会学の用語(概念)で、伝統的な共同体の成員が社会的にある状態から別の状態に移行するにあたって行う、以前の状態からの「分離」、次の段階への「移行」、新たな集団への「統合」を象徴して実践してきた儀礼のことである。当事

ック信者でなかった状態からカトリック信者になったとか、結婚していなかった状態から結婚したといったような人生の船出を実際に体験しないならば、堅信の秘跡には何の意味もないこととなります。なぜならば、意味というものは、その人の人生において、その時、何か一步踏み出すということから生ずるからです。」

ある人々は、堅信を、教会への成熟した関わりのしるしだとみなしています。しかしほかの人々は、堅信は恵みであって、がんばって取得するようなものではないし、宗教教育の卒業式のようなものでもないとい異議を唱えます。

『カトリック教会のカテキズム』は、「堅信は、洗礼の恵みの完成に必要です。そして洗礼の恵みは、それが有効になるための『批准』を必要とほしません³」と教えています。

ファルゴ教区事務局長 Luke Meyer 神父は本紙へのメールに、「教会は、いただいた恵みは賜物であって、獲得するようなものではないと教えています。この教えは、私たちがもっているすべてのものが神からの賜物であるということ子どもたちに理解させやすくしています」と書いてきました。ファルゴ教区では、2003年からはすべての小教区で、小学校3年の時に堅信を授けられるようになりました。どの小教区も、堅信準備講座に加えて、黙想会はもちろん、親と子の合同セミナーを主催しています。ファルゴ教区事務局はまた、10代の青少年養成に力を入れています。その養成は、継続的信仰教育の鍵は両親であると力説しています。Meyer は、子どもたちは若ければ若いほど社会的環境による多くの問題に直面しますが、そのような人生の大事な時期を過ごしている彼らに、堅信が恵みのすばらしい賜物を与えることができることに気づきました、と言っています。

1955年から小学校2年生に堅信を授けているミシガン州サギノー教区で、子どもの信仰教育コーディネーターをしている Paul Schroeder は、サギノー教区のいくつかの小教区で、宗教教育の登録者数が小学校2年生以降、減少傾向にあることを認めています。「多くの教区では、子どもたちが堅信を受ける前に、1年間か2年間の宗教教育クラスで学ぶことを要求しています。ところがその宗教教育クラスが、まるで小教区の宗教教育プログラムにおける登録人数を維持し続けるための手段のようになってしまっています。堅信は秘跡です。たとえどのような事例があったとしても、堅信式は6歳や7歳、あるいは8歳を対象とした宗教教育プログラムに入って学んだことに対する褒美として授けられるものではありません。でも、信仰養成が生涯続くものであるということがまだよく理解されていません。そして私たち親には、私たちの子どもたちが確実に信仰養成を受けられるようにする義務があるのだということも理解されていないのです」と Schroeder は言います。

者となる個人も共同体も、通過儀礼を行うことによって、生命力や意識の刷新を体験することが重視されてきた。Martos は、現在の堅信の秘跡の実践が、はたして通過儀礼としての機能を果たしているのかと問うている。

³ 訳者注：これは1308項の抜粋である。本文は以下の通り。「堅信を『キリスト者としての成熟の秘跡』と呼ぶ人がいますが、信仰上の成熟と年齢による成熟とを混同してはなりません。また洗礼の恵みは、無償の、個人のいさおしによらない選びの恵みであって、これが有効になるための『批准』は不必要であることを忘れてはなりません。聖トマスは次のように指摘しています。『肉体の年齢は、霊魂の成長とは関係がありません。ですから、人間は子供であっても、霊的年齢の完全さに至ることができます。知恵の書(4・8)では「老年の誉れは長寿にあるのではなく、年数によって測られるものでもない」と語られています。だからこそ多くの子供たちが、授けられた聖霊の力のおかげで、キリストのために自分の血を流すほどに勇敢に戦うことができたのです。』」

十代の問題点

Schroederによると、早期に堅信を授ける長所は、宗教担当者が養成に焦点を合わせることができることにあります。「教会や宗教が必ずしも熱心ではなくやがて終りにしてしまう事柄や、子どもが猛烈に抵抗する事柄など、十代特有の問題に対処する必要がありません」。

かつて7歳対象宗教教育主任をし、現在、中学生の堅信クラスで教えている Joe Paprocki は次のように言っています。「十代の若者が反抗期のがけっぷちにいるとき、堅信はそのような荒れがちな期間に好機を提供することができます。彼らを堅信に導くには難しい年齢ですが、同時にそれに携わることにはたくさんのプラスもあります。なぜなら、大人の信徒は教会をその時の現状のままに維持することを望むものですが、十代の若者は多くの変化、移り変わり、疑問を体験している最中だからです。彼らが青年期に入ろうとするときこそ、信仰による責任に目覚めさせるとてもよい好機となりえます。それはありうることなのです。もちろん、子どもたち皆が興味をもっているわけではなく、親の望みで参加しているだけの子どもたちもいます」。

「若い司牧者が直面している問題は、教会に十代の若者を対象とした持続可能なプログラムがないことにある」と Paprocki は言います。「堅信しか若者向け信仰養成プログラムがないというところもあります。もし諸秘跡がなかったらどのように彼らを司牧したらよいのか、ということが最も大きな不安になる傾向があるようです。問題は、堅信の秘跡が『飴と鞭』であってはならないということです。私たちは、堅信の秘跡を、私たち大人が十代の若者を司牧する単なる手段にしてはなりません。もし堅信がなければ彼らの世話をすることができないとしたら、何かが間違っていると言えるでしょう。この問題は、青少年に何が提供できるかをよりいっそうしっかりと調べ、再評価するように促しています。若年齢での堅信は、十代向けのプログラムを創造的に考え、よりいっそう意識的にイエスの弟子として生きることに焦点を当てる機会を提供するに違いありません」。

問題はどのように秘跡を実際に生きるかである、と Martos は言います。彼は、堅信を受けた者が教会の中でもっと活発な役割を担い、教会の奉仕職における信徒の参加に対して増大するニーズに応えていけるようにすることを提案しています。堅信は、現在のところまだ存在していない何かしらの奉仕職に携わるようにする重大な転換となる通過儀礼だとみなすことができるだろう、と Martos は「新たな堅信論争 ジレンマを解決するために」という未発表の論文の中で書いています。

準備への努力

典礼学者たちは本来通りになった秘跡の順序に興味をそそられているのですが、「教理担当者は8歳の子どもたちにどのように堅信を教えたらよいのか不安になり、いささか困惑しています」と、ロヨラ出版で信仰養成顧問をしている Joe Paprocki は言います。

小学校2年生に堅信を授けているミシガン州サギノー教区で子どもたちの教理を担当している Paul Schroeder は、いくつかの小教区でプログラムが難しいと感じていると言います。「7歳の子どもたちと彼らの親には一年の間にしなければならぬことがたくさんあります」。サギノー教区とファルゴ教区は、親のかかわりを特に強調しています。サギノー教区は、とりわけ秘跡を受ける子どもたちの親の準備と家庭の信仰養成に重点を置いています。教区内のほとんどの小教区では、家庭を基礎とした準備をし、堅信を小教区のお祝いとして位置付けていると Schroeder は言います。

ファルゴ教区のいくつかの小教区では、親のための手引書と、3年生か4年生の子どもたちを対象とし

た教材付きの宗教教育を提供しています。

Schroeder は次のように言っています。「7 歳児のような子どもは聖霊の七つの賜物を完全には理解しないでしょう。しかし彼らが十代から青年へと成熟するとともに、それらの賜物も成長できるのではないのでしょうか。確かに。ほかの六つの秘跡を含めて、実際にその秘跡の中で成長するまで、私たちのうちどれだけ多くの人が、それらの秘跡を徹底的に理解し、本当に把握していたのでしょうか？」

ベラルミーノ大学（ケンタッキー州ルイビル）で秘跡史を教えている Joseph Martos は、次のように説明しています。

「堅信は、4 世紀まで独立した秘跡ではありませんでした。最初の数世紀の間、非常に長い準備期間の後の一つの式典の中で、洗礼が授けられ、塗油があろうとなかろうと司教によって祝福され、実際に初めて感謝の典礼に参加しました。とりわけキリスト教がローマ帝国における公認宗教ではなかった時代には、密告されたり迫害を受けたりすることを用心して、共同体の誰もが洗礼志願者に知られることを望みませんでした。それで洗礼を受けておらず堅信も受けていない者は誰でも、感謝の典礼には参加できなかつたのです。4 世紀に、キリスト者の数が多くなり、司教がすべての洗礼式に出席できなくなったために、司祭が洗礼を授けるようになりました。後に司教がその地域を訪問した時に、司教はその洗礼を堅信という形で承認したのです（he confirmed the baptism）。中世になって、洗礼が救いのために必要だと考えられ始めましたが、人々は堅信も同じように必要だとは考えませんでした。

エウカリスチアへの特別な信心をもっていた教皇ピオ 10 世は、1910 年に、子どもたちができるだけ早く初聖体を祝うことを許可しました。教皇は、『分別のある年齢』とは 7 歳前後だと解釈しました。それで、生まれたときに洗礼を受け、7 歳か 8 歳で初聖体を受け、堅信はその後、10 歳か 12 歳のころに受けるというのが標準の慣例となったのです。

第二バチカン公会議（1962-65）の後、堅信の目的についての議論が数多くなされました。1970 年代後半から 1980 年代にかけて、典礼学者は歴史を振り返り、諸秘跡を執行する妥当な順番は『原初の順序』であるということを何人かの司教たちに納得させました。

教皇ヨハネ・パウロ二世は教皇に就任してすぐに、米国司教団に、年齢についての明確な規範を決めるように命じました。しかし司教たちは、早い年齢に対しても遅い年齢に対しても過半数を得ることができなかつたため、7 歳から 18 歳の範囲にすることを合意し、教皇庁はそれを認可しました。」

（翻訳：カトリック大阪教区典礼委員会）